

虫 と 私

(農林学系) 田 付 貞 洋

幼い頃から虫が好きでした。物心つく以前には、「虫」ならば何にでも興味を示したらしく、脱ぎ棄てた半ズボンのポケットから出てきた小さな丸い「木の実」が畳の上でたちまち沢山の脚を生やして四方八方へ歩き出したとか(オカダンゴムシだったのです)、飼い猫みたいに、捕えたトカゲを得意顔でぶら下げてきて祖母を驚かせた、等の話を後に色々聞かされました。

小学校へ上る頃から、私の興味は「専門」化し、6本脚の「蟲」に集中するようになりました。といっても、やはり子供のこと、昆虫の中でもノミ、ハエ、カとか、アズキゾウムシやアオムシコマユバチ等ではなく、興味の対象は蝶やセミ、トンボ等でしたが……。夏休み、自宅の庭、学校の裏の林に始まり、街はずれの沼、水田や小川近くの叢、その向うの神社の杜、それに連なる雑木林へと徐々に足を延ばしてゆきました。私のホームグラウンド、埼玉県のパオ市にはその頃(昭和30年前後)まだ、種々の昆虫を育む環境があちこちに残されていました。そこでまず、住宅街と郊外では見られる昆虫が違っていることを知りました。郊外でも田畑のように耕作されて開けたところには昆虫の種類は多くないのに、帯状に続く台地の雑木林に行けば、そこには他では滅多に見ることのできない昆虫が数多く見られました。やや年老いたクヌギの幹から樹液が滲出しているところは、雑木林の中でも「オアシス」でした。こういう場所は一度発見すれば、何度尋ねていっても大概「誰か」がやってきていました。ここでは種類や数が豊富なだけでなく、昆虫の態度も街でみられるものとは違っていました。典型的な例がタテハチョウの仲間でした。この類はたまに街中でみかけることはあっても、大概は物凄いスピードで飛び回っているか、梢の上を悠々と滑空しているため、中々捕虫網が届きません。時には地上や草の葉に静止することがありますが、大変敏感で接近するのも困難なのです。そういう仲間が「オアシス」では丸で別人(?)のようにのんびりとしていました。幾種類もが仲良く集合して樹液に口吻を伸ばしており、カナブンやスズメバチがそばにいても一向に平気の様でした。こういう時には近づくのもたやすく、街では指をくわえて眺めているだけだった蝶が何匹も採集できるのです。

どうして街中と雑木林とで蝶の態度がこうも変わるのだろうか、子供なりに考えてもみました。蝶の好む餌の存在、人間や車の影響がほとんど無いこと、樹木の存在等々に加えて、もうひとつ強く感じたことは、仲間の存在ということでした。「オアシス」には同じ種類はもち論、近縁の種や全く異なった種族の昆虫が沢山集まってきます。こういった他の昆虫の存在も、どうも蝶をのんびりとさせる原因のように思えたのです。

似たようなことは他の昆虫でもありました。クマゼミは良く知られているように、西日本に多く、関東では稀なセミです。パオ市では年によってはひと夏に数回鳴き声がきかれました。この大型で真っ黒な体と透明な翅をもつセミに私は強く惹かれていましたが、たまにパオ市にやってくるものは、高い樹の梢近くで一鳴きするとすぐに飛び去ってしまうし、たとえ、鳴いている間に近づこうとして

も、敵はいち早く察して逃げてしまうので、遂に一匹も採集できませんでした。

ところが、ある年の夏休みに連れていかれた京都御所では別種のようなクマゼミに出会い驚きました。御所の広い庭にはこのセミの声が充満していました。大きな樹の幹にも枝にも沢山のクマゼミが見えましたが、ここのセミは一鳴き毎に飛んで移動するということがなく、さらに印象的だったのは、木の下に近づいても逃げようとしないうばかりか、鳴き止む様子すらなかったことでした。

浦和で経験したセミの態度の原因としては、クマゼミ個体群の中で、特に移動性が強く敏感な個体が群から離れて通常の分布圏以外へやってきたためとも考えられます。しかし、それよりも、この場合も仲間が周囲に存在するかどうかが強くと影響したと考える方が自然のように思われます。それは、その後、色々な蝶やセミ、トンボ等でも似たような態度の相違をみることでできたことから言えることです。

中学から高校時代、良き虫友を得て私の虫熱はいよいよ重症に陥りました。その頃から対象は蝶に絞られ、そして採集する場所は近県から遠隔の地へと急速に拡がり、また季節も春から秋、さらには冬(越冬中の卵や幼虫を探す)にまで及びました。特定の種とその生息環境との密接な関連性はいよいよ私の興味を惹き、遂には、山道を歩きながら、その環境条件から採れそうな種類がわかるようになっていきました。また、こうした過程で必然的に蝶の幼虫の食草あるいは成虫の餌等、蝶の生息環境にある植物にも興味をもつようになりました。

さて、私が虫に没頭していった頃は、丁度日本の高度成長期にさしかかった時期にあたり、様々な環境問題が表面化し始めていました。農地には強力な農薬が散布され、トンボ類等の水生昆虫がまず打撃を被りました。一方、郊外の採集地は道路や宅地の造成でどんどん林が切り開かれていきました。中でも私達にとって最大の「敵」はゴルフ場造成でした。狭い国土に、何故広い面積を占有する施設を沢山作ることが許されるのか？小田急沿線の、私達が足繁く通った好採集地が、ある日見る影もなく切り崩されたのを目の当たりにした時、私達は半ば本気で語りあったものでした。「オイ、あそこに大砲ぶっぱなしてやりてえナ！」

その後、長い年月が経過しました。その間、自然環境保護の運動も各地で起り、一定の成果をあげてはきたものの、未だ十分に理解されているとは言えません。今も、日本のあちらこちらで、古くて新しいテーマ、「開発か保護か」で争われています。また、今日ではこの問題は日本国内に留めるべきではなく、熱帯、亜熱帯諸国等においても我国と同様に、いや、そのスケールと格段に豊かな生物群集を考慮すれば、より一層深刻に考えるべき時と思われる。

自然の中の昆虫とのかかわりあい希薄になって久しい私ですが、環境科学研究科の一員に加えて頂いたのを機に、もう一度、昆虫達の住む環境について真面目に考えるとともに、「開発」と「保護」の意味を把え直していきたいと思っています。